

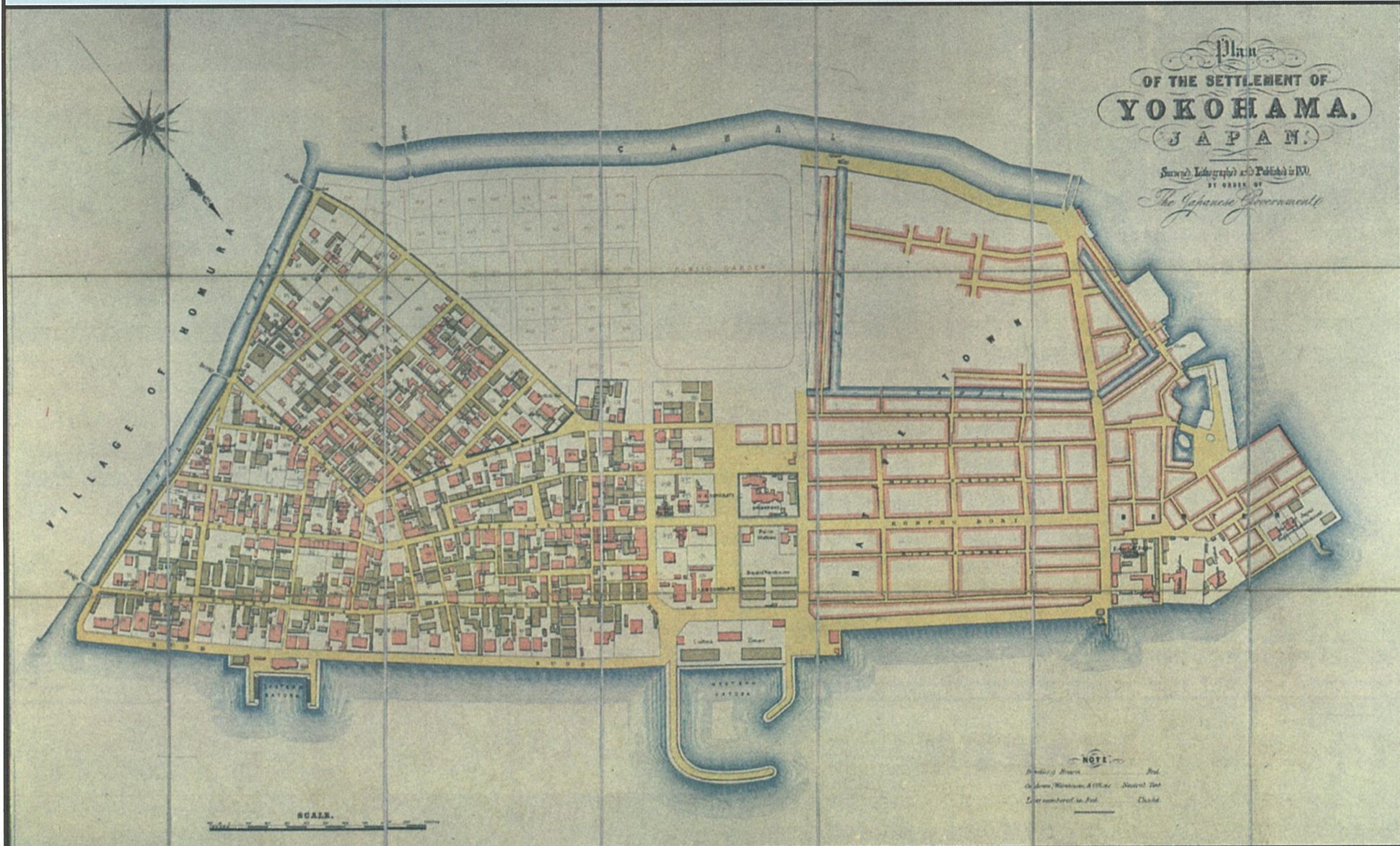
歴史を生かしたまちづくり

横濱新聞

第23号

平成21(2009)年3月5日発行

企画編集・発行：横浜市・横浜市歴史的資産調査会
 事務局：財団法人はまぎん産業文化振興財団内
 〒220-8611 横浜市西区みなとみらい3-1-1
 TEL.045-225-2171 FAX.045-225-2172



Plan of Settlement of Yokohama(明治政府の要請により外人が製作) 明治3年(1870) 神奈川県立文化資料館所蔵

横〈浜〉の150年を〈横〉断する 堀 勇良 (横浜市歴史資産調査会調査委員)

横浜公園にR.H.ブラントン(Richard Henry BRUNTON 1841-1901)の胸像がある。生誕150年、没後90年の1991年建立されたものだ。ブラントンが見詰めているのは日本大通りである。

1866年の横浜大火の後の、横浜公園や日本大通りの整備を含む一連の横浜居留地改良工事がブラントンの計画により施工され、現在につながる関内の都市的骨格が形成されたのであるが、その改良工事計画のベースとなったのがここに掲げる横浜居留地地図である。居留地下水道の設計に不可欠な高低測量も実施されたはずであるが、その測量図は伝存していない。

横浜公園から日本大通りを望むと、本町通りに向けて緩やかな上り坂となっていることが判るであろう。横浜公園は、南側に広がっていた釣鐘状の入海を埋立て、開港時には「港崎町」遊郭、大火後は「彼我(ひが)公園」として造成されたところである。1990年代の横浜公園の再整備工事時に発掘された関東大震災前の園路側溝は、現在の公園の地面下1m近くから確認されていることからすると、この緩やかな上り坂は「日本大通坂」と呼びたいくらいの、より傾斜のきつい坂道であったはずである。

「日本大通坂」は、横浜地方裁判所—三井物産ビル辺

りから平坦になる。本町通りは、「横浜」の名の起り点とされる、山手の丘から西に延びた「横」に長い「浜」を有する砂嘴のいわば尾根道にあたる。2001年、日本大通りの改修整備工事時に、神奈川県庁舎前から、路盤下十数センチメートルのところからマカダム舗装(碎石舗装)の遺構が検出された。この遺構は、ブラントンの「横浜の下水・道路整備計画書」(1869年3月)の道路舗装仕様と一致することから、1870年から1871年にかけて施工された横浜居留地下水道敷設工事に伴う道路舗装の遺構である可能性が高い(剥ぎ取り遺構は日本大通の横浜都市発展記念館で常設展示されている)。

日本大通りのマカダム舗装遺構の下方は貝殻混じりの砂地であり、上部はアスファルト舗装の積層であることから、本町通りの南北近くの地表面の高さは開港時とさほど違ってはいないと思われる。日本大通りが海岸通りに突き当たる交差点の手前には、ブラントン時代の陶管下水道を1880年代に改造した煉瓦造下水道のマンホール遺構が地中に存置されている。横浜開港資料館新館地下ドライエリアの煉瓦造卵形管、開港広場の煉瓦造マンホールに繋がるものだ。ということは、日本大通りと開港広場の煉瓦造マンホール遺構を結ぶラインに関東大震

災前までの海岸通りが位置していたことになる。いいかえれば、震災後、神奈川県庁と横浜開港資料館(旧イギリス総領事館)の敷地は北側に拡張され、海岸通りも港方に移されて、日本人町の海岸通りと直線化されたことになる。

海岸通りの北方は旧横浜税関用地。松茸塔の横浜税関庁舎は、海岸通りと旧横浜税関用地に跨る位置に建っていたのであろう。海中への数度の埋立と嵩上げ—発掘された旧税関構内軌道転車台から震災前の地盤高が確認される—により開港時の海岸線は跡をとどめてはいない。とはいえ、開港以前の浜辺が埋立地の下に眠っている可能性がないわけではない、ペリーの上陸地とともに。ペリーの一步は開国の一步であるとともに、横浜開港につながる一步でもある。

横浜公園から象の鼻埠頭までの水平距離は約1km。千分の一にすれば1m長の地図になる。横浜公園から象の鼻埠頭までの横断面を千分の一で図示するとすれば、象の鼻埠頭のマウンドを想定しても、その垂直方向の変位はらくらく1cm内に収まってしまふほどに過ぎないが、この1cmには、ペリーの第一歩を端緒とした横浜開港150年の歴史が積み重なっているのである。

象の鼻地区の土木遺構

横浜市では、今年開港150周年を迎える中、横浜港発祥の地である象の鼻地区を、横浜の歴史と未来をつなぐ象徴的な空間「象の鼻パーク」として再整備しているところである。象の鼻地区にある開港から明治期にかけての土木遺構について紹介したい。

象の鼻防波堤

安政6年(1859)の横浜開港に伴い、幕府は開港場の中央部に波止場を建設し、その中心地点に運上所(税関)を設置した。この波止場は、2本の突堤が岸からまっすぐに海に向かって突き出した簡素なもので、東側の突堤は外国貨物の、西側の突堤は国内貨物の積卸しに使用された。

慶応2年(1866)の横浜大火により被害を受けた税関施設などの復興と共に、慶応3年(1867)、幕府は東側の突堤を延長して象の鼻のように弓なりになった防波堤を築造した。これが「象の鼻」のはじまりである。

象の鼻パークの整備工事中に、大正12年(1923)の関東大震災で沈下したと思われる象の鼻防波堤の石積みと舗装の石材が発見されている。

横浜税関遺構 煉瓦造2階建倉庫

レンガ積みの遺構は、税関施設の一つであった「煉瓦造2階建倉庫」の基礎部分である。倉庫は、明治中期から関東大震災までの間、国内外からの貨物の保管や検査をするために使われていた。

この倉庫は、横浜正金銀行(現在の神奈川県立歴史博物館)を始め、後に横浜の街に多くの建築を残した建築家の遠藤於菟が監督に当たった建物である。



象の鼻防波堤

象の鼻地区一帯はかつては横浜税関の敷地であり、税関の各種施設がずらりと並んでいた。明治33年(1900)に発行された「横浜税関一覧」という小冊子には横浜税関の沿革、組織、業務内容、施設などが記されているが、その付図には、明治18年(1885)建設の2代目横浜税関本庁舎、象の鼻防波堤基部にあった明治26年(1893)建設の税関監視部庁舎、上屋や倉庫等の状況が記載されている。

横浜税関遺構 鉄軌道と転車台

明治33年(1900)に発行された「横浜税関一覧」の付図



横浜税関遺構



転車台

には、横浜税関の上屋や倉庫の背後に、縦横に走る鉄軌道(線路)やその交差部に設置された転車台(ターンテーブル)が描かれている。

これらの鉄軌道や転車台は概ね明治20年代後半に整備された。鉄軌道の幅員は1.06mであり、わが国の一般的な鉄道の車軸幅と同じであった。

また転車台は鉄部の外径が約2.5mあった。この大きさでは回転できる車両の規模も限られることから、出土した軌道網は敷地内で荷役作業を行うために設けられたものであると考えられている。

北仲通北地区 旧灯台寮護岸

横浜港の開港前、大岡川の河口に入り江をつくって長く伸びる砂州の先端部分は「象が鼻」とよばれた景勝の地であり、この地一帯は横浜村の鎮守府たる弁天社の社領地であった。今は北仲通北地区として、再開発が予定されている地区であるが、近代日本の歴史の中でも日本の灯台網の中心地であり、様々な海外の技術がこの地を介して日本全国に伝えられていった、日本の技術史上記憶されるべき土地ともいえる場所である。

この土地は、開港後幾度も埋立てが行われていることが、文献などでも分かっている。実際に、各時代の地図を重ねていくとその様子がよくわかる。まず、明治2年に、州干弁天地先の役宅の北方約80mの海面を埋め立て、長さ約40mの先端が曲がった突堤が築造されている。埋め立て後の地形が明治3年の測量図(「Plan of the settlement of Yokohama」)に記載されている。この時、この場所に灯台築造の技術者として招かれたR.H.ブランドンらの役宅及び事務所が建設され、その写真がいまでも記録として残っている。その後、明治5年末か6年初

めに、再度北方に約50m埋め立てを行ったため、長さ約40mの突堤は新埋立て地内に埋没した。明治11年の内務省測図には、同様な突堤が記載されていることから、埋め立ての際にほぼ同じ

形の新しい突堤を築造したと想定でき、これが現在の布積(方形の石を目地を横に通しながら積む方法)護岸の位置と一致している。この新埋め立て地の北西端にあたる大岡川の河口部には、明治7年3月にレンガ造の初代試験灯台が建設されている。

明治30年3月、この地先若干を埋め立て、ここに鋳物工場が移転してきているが、この際に築造された護岸が、



布積の護岸



谷積の傾斜した護岸

谷積(石を菱形に組み合わせながら積む方法)の傾斜した護岸だと考えられる。明治32年9月に、この護岸の北西端に第2代試験灯台の工事が着工され、明治33年に11月に完成している。

自動車道から何気なく眺めていた北仲通北地区の護岸は明治期の護岸であり、開港から150年の歴史を静かに見守ってきた貴重な遺構と言える。

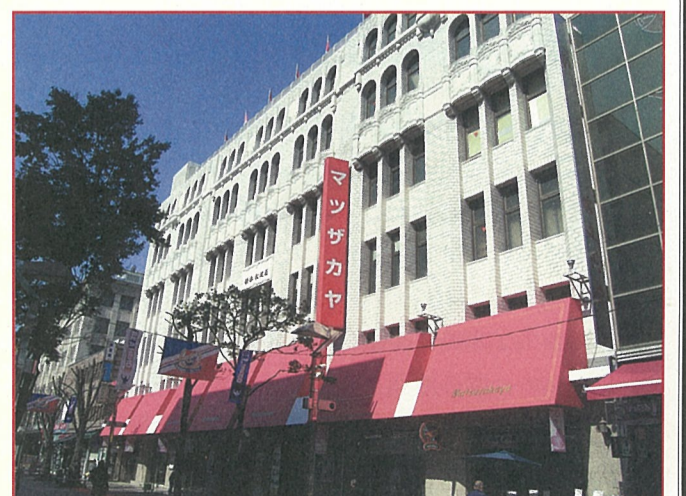
横浜松坂屋 144年の歴史に幕を閉じる

横浜伊勢佐木町のシンボル、横浜松坂屋が2008年10月26日に閉店した。開港期の横浜の豪商、初代茂木惣兵衛が創業した野澤屋呉服店の伊勢佐木町支店として明治43(1910)年に開設。後に野澤屋、横浜松坂屋と名前を変えながらも横浜を代表する百貨店であり続け、特に昭和初期から40年代にかけては庶民の娯楽と憧れの象徴、最先端の文化の発信基地であった。6月の閉店・解体の報道以来、伊勢佐木町には連日名残を惜しむハマっ子たちが詰め掛け、最終日は大きな拍手に包まれて144年の歴史に幕を閉じた。

横浜松坂屋本館は、昭和9年増築時のファサードを基

本としたアールデコ様式の優美な外観を持ち、横浜市認定歴史的建造物に認定されている。平成16年にはこの外観を保全する工事が行われ、これからは貴重な歴史的景観が守られると安心していただけに、今後の計画の行方が大変気になるところである。日本建築学会や建築家協会等の専門家団体をはじめ、横浜市からも外壁の保存要望が出されている。

現在、「横浜松坂屋」の看板は外され、仮囲いに覆われたまま建物は残されている。開港150周年の記念の年に歴史の生き証人が姿を消すのか、市民に愛されてきた建物が新たな役割を得て再生するのか。注目を集めている。



横浜松坂屋本館

港ヨコハマの顔 マリントワーと氷川丸、リニューアルオープンへ

横浜開港100周年を機に誕生した横浜名所、マリントワーと氷川丸は、2006年12月に共に営業を終了していたが、開港150周年を前に新しい姿に生まれ変わる。

氷川丸は1930年竣工の大型客船で市指定有形文化財(2003年指定)。戦前は主にシアトル航路の外航貨客船として、戦中戦後は病院船、復員輸送船として活躍。1960年の現役引退後、横浜港開港100周年記念事業の一環として山下公園に係留された。2006年の営業終了後、改修工事を経て2008年4月にリニューアルオープンし、多くのファンを集めている。客船の代表的な公室であった一等社交室のほか、一等食堂や一等喫煙室などを竣工時のアール・デコ様式に改修、「北太平洋の女王」と呼ばれた姿を再現している。

マリントワーは同じく開港100周年記念事業として市民の発意により1961年に建設。当初は赤白の縞模様だったが、平成元年の横浜博覧会を機に赤白のグラデーションに塗り替えられた。今回のリニューアルにあたっては、外観はシルバーとブラウンオーブを基調としたシックな色あいにお色直しする。リニューアル後の運営は民間の事業者を募集、観光や文化交流など多彩な機能が盛り込まれ、2009年春にオープンする予定だ。



氷川丸



マリントワー(完成予想図)

「歴史を生かしたまちづくりセミナーVol.31」 アントニン・レーモンド生誕120周年記念 「建築家アントニン・レーモンドを知る」開催!

平成20年3月8日(土)、第31回歴史を生かしたまちづくりセミナーが、中区山手町のフェリス女学院12号館で開催された。(主催：横浜市・横浜市歴史的資産調査会)

今回のセミナーは、昨年生誕120年を迎えたアントニン・レーモンドを採り上げた。レーモンドは戦前と戦後間もなくの日本のモダニズム建築を先導し、極めて大きな影響を与えた建築家であり、全国に多くの作品があるが、横浜とも縁が深く、今回見学したフェリス女学院10号館(旧ライジングサン石油会社社宅)の他に、山手のエリスマン邸や伊勢佐

木町の不二家等を設計している。セミナーには定員を大幅に上回る160人余りの参加応募があり、急遽3回に分けての開催となった。

レーモンドの日本における作品群について「実はモダニズム建築よりアールデコのほうが好き」という吉田綱目教授による講演が行われた。その後、平成19年度の認定歴史的建造物に認定されたフェリス女学院10号館の見学に合わせて、「僕はレーモンドのモダニズム建築が大好きです」という関和明教授による現地解説があり、参加者からは活発な質問が飛んだ。



セミナーガイドツアーの様子

横濱新聞20年の歩み

横濱新聞は、市内の歴史的建造物を広く紹介するため、平成元(1989)年に創刊された。これまで、近代建築、西洋館、古民家、土木遺構といった市内に現存する趣深く魅力的な歴史的建造物が表紙を飾ってきたが、創刊20年を迎えるにあたり、そのすべてをご覧いただく。

写真とともに建造物への思いを読者に語りかける巻頭エッセイも、個性に溢れ、味わい深いものである。



横浜市歴史的資産調査会が発行し、歴史的建造物について様々な情報満載の印刷物3点をご紹介します。

平成元年から年1回程度発行している「歴史を生かしたまちづくり横濱新聞」の創刊号から第20号までを合本したものが「歴史を生かしたまちづくり横濱新聞縮刷版」(価格1,000円)である。今までの変遷がわかり、読み応えのある一冊となっている。

「都市の記憶-横浜の主要歴史的建造物」(価格600円)は、写真入りで市内の歴史的建造物をコンパクトに紹介。地図付きなので、本を片手に歴史的建造物巡りを楽しむこともできる。「都市の記憶」シリーズの一つ「横浜の土木遺産」(価格1,200円)は市内の代表的な土木遺産を写真入りで解説したもの。

これらは横浜市役所市民情報センター、横浜都市発展記念館、神奈川県立歴史博物館、有隣堂本店等にて販売中。

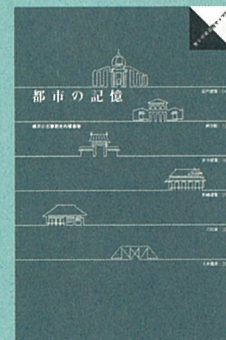
好評販売中

横濱新聞 縮刷版
(創刊号~第20号合本)



1,000円

都市の記憶
横浜の主要歴史的建造物



600円

都市の記憶
横浜の土木遺産



1,200円

開港記念会館ステンドグラス修復

平山健雄 (横浜マイスター 光ステンド工房)

関東大震災後昭和2年に再建された横浜市開港記念会館2階ホールと、現在は資料室として使われている部屋の間仕切りとして、同じ年に制作された特徴ある美しいステンドグラスが平成20年6月から修復作業に入った。左側から「呉越同舟」、「鳳凰」、「箱根越え」と呼ばれているこの三面の作品は、日本最初のステンドグラス工房と云われている宇野沢ステンドグラス製作所の仕事とされている。

制作後80年を経たこの3枚のステンドグラスパネルは、ガラスとガラスを繋いでいる鉛の棧の劣化が全体に認められ、又その為にガラス自体の重さを支持出来ずたわみを生じ、最大13mmの迫り出し部がある。その結果80箇所以上のガラスの割れが見つかった。ガラス自体の汚れもかなり進んでおり、暖房の為に使用した石炭ストーブなどの煤や煙草のやに、ほこりなどがこびり着いて、竣工時の光の美しさを遮っていた。

三面の窓の綿密な採寸の後、全く役に立っていない鉄製の補強棒を外し、左右それぞれ4枚で繋がれているステンドグラスを上部から取り外し、開港記念会館地下の仕事場に降ろして鉛棧のラインとその太さを写し取る地道な修復作業が始まった。その後鉛棧とガラスの分解に始まり、鉛棧とガラスの隙間に詰められているパテ(石灰を亜麻仁油で練ったもの)を剥かし取りながら、慎重に鉛棧を切り一枚一枚ガラスを取り外してゆく。中央の鳳凰パネルに関しては、鉛棧のラインが職人技として非常に美しく、解体してしまうのは惜しい為、H型鉛棧の上部だけがぎ取ってガラスをすくい出し、鉛のラインはそのまま残しておく手法を考えた。鉛棧はベニヤ板に接着し資料として残すことにした。三面のガラスピース総数は2046枚。次に一枚ずつ超音波洗浄器による洗浄で、ガラスのヒダの中に入り込んだ汚れを超音波は見事に除去してくれた。

再組立ては鉛棧の中が4、5、6、8mmと使い分けら



左から「呉越同舟」、「鳳凰」、「箱根越え」

れているオリジナルと同様に、新しい鉛棧での組み立てが始められる。レールの形をした鉛の棧にパネルの端から一枚ずつ洗浄したガラスを溝の中に差し込み、順次組み繋いでゆく。最後に鉛の表面にハンダ付けを施しパテを詰める。ハンダ付けされた鉛棧の表面は硫酸銅溶液で銅色にメッキをして磨き上げられ、最終工程の補強棒とパネルの同時取り付けを待つことになる。

ステンドグラスパネルは時間が経てば必ずたわみを生じるもので、たわみをそれ以上進ませない補強方法として丸棒をパネルに針金で結び付ける昔ながらの方法が、この3枚のパネルにも施工されていた。しかし丸棒自体が変形しパネルに寄り掛かっていた為に、却ってそのたわみを助長していることが判明している。今回の修復では、丸棒を太く縦横格子状にすることで補強棒自体の変形を防ぐことになった。又、強化ガラスを両面施工することにより打撃からの保護をし、地震での破損を最小限に食い止めることを最優先に考えた。

この平成20年から21年にかけての修復により80年前の美しき光が甦り、2階のホールに満ちあふれることを確信している。



4枚で繋がれているステンドグラスを上 ガラスと鉛棧を分解部から取り外す



鉛棧のラインが職人技として非常に美しい 超音波洗浄器による洗浄



洗浄後

再組立て



ハンダ付け

パテ詰め

「フェリス女学院10号館」のDOCOMOMO2007年選定

鯉坂 徹 (株式会社三菱地所設計 建築設計部副部長)

ドコモモ(DOCOMOMO=Documentation and Conservation of buildings,sites and neighbourhoods of the Modern Movement)とは聞き慣れない名前ですが、20世紀の建築の潮流だったモダン・ムーブメントの歴史的・文化的な重要性を認識し、その成果を記録し、現存建物・環境の保存を訴えるため、1988年に設立された国際組織です。現在、DOCOMOMO Internationalは50カ国以上の支部で構成されパリに本部があります。一方、DOCOMOMO Japanは、1997年から設立に向けた活動がはじまり、1998年に日本建築学会内に設けられたドコモモ対応ワーキング・グループを母体に組織を整え、2000年のブラジリア総会でDOCOMOMOの正式メンバーとして承認されました。2000年にDOCOMOMO20選展(鎌倉の神奈川県立近代美術館)を開催、2003年9月には20選に80件を加えたDOCOMOMO100選展を汐留で開催しました。そして、2005年度に15件、2006年度、2007年度に各10件のリストを発表し、現在135件の作品が選定されています。(注1)

山手のフェリス女学院10号館は、2007年度のDOCOMOMO Japanの選定作品の一つとなりました。この建物は、1929年に竣工したライジング・サン石油会社社宅(「10人の速記者のためのフラット」設計:アントニン・レーモンド(注2))を、1977年頃より大学が研究室や演習室として利用してきた2階建て(一部地下1階)の鉄筋コンク

リート造です。横浜のレーモンドの作品が次々に姿を消す中、フェリス女学院の施設として大切に使われてきたため、外装(スチールサッシ)・インテリアとも非常によく旧態をとどめています。もともとは、関東大震災の復興の建築で、ライジング・サン石油会社横浜本社と根岸の丘の上に建てられた17戸の社宅群と同時期に計画されました。外観は一見すると、ドイツのバウハウス(1926年 設計:ワルター・グロピウス 世界遺産)のような白い(注3)四角の箱状の建築ですが、頂部のタイルやサッシ等に少し装飾的なデザインがあり、北側の外観はモダニズムの直線的なデザインというより凹凸の多い構成となっています。選定に

際しては、アントニン・レーモンドの作品として、東京女子大学(1931)、聖パウロ教会(1934)、群馬音楽センター(1961)、軽井沢新スタジオ(1962)、南山大学(1964)の5作品がこれまでに選ばれていたため、他の建築家の作品を推す意見もありましたが、最終的には、共同住宅で戦前の建築であることが評価され選ばれました。

重要文化財となったDOCOMOMO選定作品もあり、モダン・ムーブメントの建築が日本でも徐々に評価されはじめていますが、洋館や様式建築に対してモダン・ムーブメントの四角い箱のどこに価値があるのかと言われるこ



フェリス10号館南外観



フェリス10号館北外観



フェリス10号館内部



バウハウス

とが多々あります。フェリス10号館の選定や外装の修復を通じて、私たちの現代生活のバックグラウンドにもなっているモダン・ムーブメントの建築への理解と評価が少しでも深まることを期待します。

(注1) <http://www.docomomojapan.com/docomomomember.html> より入会手続きができます。

(注2) 1888年チェコ生まれ。1976年アメリカで死去。1919年にライトの「帝国ホテル」のアシスタントとして来日し1937年に離日、再度1947年に来日し1973年にアメリカへ。日本で多数の建築を設計した建築家

(注3) 外装修復時に、10号館の竣工時の色調がページュだったことが判り、オリジナルに近づけるよう工事中。